とある作家の一方通行

武芸者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある作家の一方通行

【Ｎコード】
Ｎ６４６９Ｙ

【作者名】
武芸者

【あらすじ】
もしも一方通行が漫画を描いていたら？
まぁ、中の人ネタですね。漫画を描く一方さんと平和な学園都市をお楽しみください。
ネタ、番外編、基本ギャグ。シリアスなにそれ美味しいの？
ちなみにこの作品はＡｒｃａｄｉａにも投稿しています。

第1話　作者取材

小さい頃、物語に出てくるヒーローに憧れた。
ブラウン管の向こうの世界、小説や漫画の向こう側の世界、悪役を倒し、ヒロインを護る正義の味方に憧れた。
だが、その憧れは所詮、絵空事のような妄想だ。誰でもヒーローに、正義の味方になんてなれるはずがない。そんな存在になれるのは、僅かな選ばれた者達なのだと思う。
少なくとも自分には無理だ。そう決め付け、ヒーローになるなんて夢は早々に諦めていた。

だが、世の中は何が起こるのかわからない。だからこそ面白いのだ。
確かに自分はヒーローにはなれなかった。だけど、今はそのヒーローを創り出す仕事をしている。

「上条、これ、背景に校舎頼むわ」

「おう」

原稿用紙をアシスタントに手渡す。
手渡した人物、この部屋の主は新たな白紙の原稿を取り出し、コマ割りをして絵を描き始めていた。漫画家、それが彼の職業だ。
学生と言う身分でありながらとある週刊雑誌に連載し、読者に絶大な支持を得ている人気作家である。

「あァ！？帝督ン、そこはスクリーントーンだって言ったろォがよォ！何ベン同じこと言わせンだァ？」

「わ、わりぃ……ってか一方通行！その呼び方やめろって言っただ

ろうが」

作家の名は一方通行（アクセラレータ）。連載している漫画のジャンルは学園異能バトル物。

タイトルは『クロウ』。烏のような黒翼を持つ少年、九朗が主人公だ。

「無駄話はいいから、早く原稿上げろ。明日には木原くン原稿取りに来ンだぞ」

「ちっ……わかってるよ」

「一方通行、背景出来たぞ」

「そォか」

アシスタントは上条当麻（かみじょうとうま）と、垣根帝督（かきねていとく）。

この2人を扱き使い、一方通行は漫画を描いていた。

「……おイ」

「なんだよ？」

不機嫌そうな一方通行の声。

何事かと思う上条に向け、一方通行は彼が描き上げた原稿を机に叩きつける。

「なンなンですかこれはァ！？俺ァ校舎って言ったよな？いや、確かにこれは校舎だ。だが雰囲気的に、展開的にここは上品そうな、例えるなら常盤台みてェなお嬢様学校のような校舎だ。これはテメ

ェの通っているボンクラ学校の校舎だろォが！！」

「酷くね？ってか、そう言う指示は先に出しとけよ」

「ンなもン、雰囲気で読めよ。何年アシスタントしてんだテメェ？」

「いや、まだ数ヶ月なんだけど……」

「言い訳はいいんだよ……ったく」

一方通行はぼりぼりと頭を掻き、深いため息を一つ付く。
そして唐突に、

「しょうがねェ、取材行くか」

そんなことを言い出した。

「はぁ、取材？木原さん明日原稿取りに来るんだろ？」

「ンなもン余裕だろーが。まずはこの背景をどーにかすンのが先決だ。上条、帝督ン、常盤台に行くぞ」

「ちょ、待てよ一方通行」

「やれやれ……」

上条と垣根の不満を他所に、一方通行はデジカメを手にして常盤台へと向かうのだった。

「最近の中学生は発育いいなァ……」

「ちょっと待てぇ！！」

その取材、一方通行と上条、垣根の３人は学園都市の中でも５本の指に入る名門校、常盤台中学を訪れていた。
学園都市どころか世界有数のお嬢様学校であり、義務教育終了までに世界に通じる人材を育成することを基本方針としている。
生徒数は２００人弱と少ないが、その質はかなり高い。レベル５、２名、レベル４、４７名、それ以外は全員レベル３の能力者だ。
在学条件の一つにレベル３以上であることが含まれており、全生徒の能力干渉レベルを総合すると生身でホワイトハウスを攻略出来ると噂されるほどのとんでもない学校だ。
学園の園と呼ばれる場所にあり、そこにはいるのには大変な苦労をするが、第一位と第二位に常識が通用するはずがなかった。

「これやばいだろ？何してんだお前ぇ！？」

「ウルセェな。取材だよ取材。校舎の写真は撮ったし、ついでに眼福をだな……」

「それがやばいって言ってんだよ！」

現在の季節は夏だ。夏休み前であり、最近だんだんと暑くなってきている。
そんな期間限定の体育の授業、水泳。一方通行達は校舎を撮影した

デジカメ片手に、今度はプールで戯れる少女達の水着姿を撮影していた。

「帝督ン、今の子何点だ？」

「９０点。中学生であの胸は反則すぎるだろ。お前は？」

「う～ン、５０点？いや、巨乳は別に嫌いじゃないけどよォ、俺的にはもうちょいつつましい方がだな……」

「アクセロリータ」

「あン！今なンつった！？冷蔵庫にすっぞ、コラ！」

「ちょ、落ち着けって！ってか、マジでまずいだろころ！盗撮だろ？犯罪じゃねぇか！！」

一方通行と垣根を宥めつつ、全うなことを言う上条だったが、当の一方通行と垣根はその発言を一笑する。

「おィおィ、イイ子ちゃンぶってンじゃねェぞ三下ァ」

「お前も男だろ？なら興味あるよな？むしろ、女に興味が無い男なんていないと断言する」

「いや、上条さんだって確かに健全な男子ですよ。確かに女の子には興味があります。だけどよ、こんなことをしなくても……」

「だからイイ子ちゃンぶってンじゃねェよ！一級フラグ建築士様は余裕ですなァ」

「まったくだ」

「いやいや、何ですかその聞いたことも無いような職業は？上条さんはまったく女性にはもてませんよ。むしろ顔が良い一方通行と垣根の方がもてるんじゃないんですか？」

「……おィ、こいつ殺さねェか？」

「いいな、それ。幻想殺し（イマジンブレイカー）がどれほどのもんか、俺の未元物質（ダークマター）と一方通行で試してやるよ」

「うぇ！マジですか！？」

表情を歪め、楽しそうに会話を交わす一方通行と垣根だったが、当の上条からすればたまったものではない。

学園都市のトップツー相手に勝てるわけが無い。もっとも、一方通行と垣根も本気ではなく、冗談だったので敵意は皆無だ。

「冗談だよ、誰が三下なンか相手にするか」

「心臓に悪いからやめてくれよ……ん？」

一方通行の言葉に胸を撫で下ろす上条だったが、あることに気づいて気まずそうな表情を浮かべる。

「そこでなにをしている？」

「あ、その……これはですね」

それは警備員の存在。取材と称して訪れた常盤台だが、当然アポなんて取っているわけが無い。
不法侵入であり、しかも一方通行はデジカメで少女達の水着姿を撮影していた。言い訳のしようが無い犯罪行為、盗撮だ。

「おい！一方通行……」

「お、アレなンかよくね？あのつつましい胸なんて最高だねェ」

「相変わらずそっちの趣味かよ、アクセロリータ。ん、アレって第三位じゃね？」

「マジか？」

しかも、もはや言い訳不能な会話を交わしており、警備員は確定的な視線で上条達を見つめている。

「……ちょっと警備員室まで来てもらおうか」

「いや、ちょっと待ってください！いや、ホントに待って！一方通行！垣根！！」

「あン？」

「ん？」

警備員に手をつかまれ、引き摺られそうになった上条は藁にも縋る思いで助けを求める。
上条の声に反応して、一方通行と垣根は上条へと視線を向けたが……

「じゃあな」

「あばよ、三下」

「え、えええええ！？」

状況を把握するなり、あっさりと上条を見捨てて2人は逃げ出した。
垣根は自身の能力、未元物質で天使のような羽を創り出し、それで空を舞う。
一方通行も能力で、ベクトルを一点に集中させて空に落ちるように飛ぶ。
見捨てられ、取り残された上条は肩をがっしりとつかまれているために逃げることは出来ない。

「不幸だあああああああああ！！」

少年の悲しき叫びが、常盤台中へと響いた。
それでも平穏な日常。今日も今日とて、学園都市はとても平和だった。

第1話　作者取材（後書き）

基本、一方さんは変態です。ロリです。帝督ンもロリではないけど似たようなもの。
そんな二人に巻き込まれ、不幸な上条さんをお楽しみください。

第2話　編集会議

『クロウの人気は文句なし、読者アンケート1位。この調子で頑張ってくれ』

「はいよ、統括理事長……もとい編集長」

モニター越しに行われる会話。
学園都市が出版し、日本中で発売されている漫画雑誌、『週刊少年サタデー』
その会議が画面越しに行われており、クロウの担当である木原数多編集者は編集長の言葉に相槌を打つ。

『では、続いての議題だ。今後の新連載作品のラインナップだが……』

ネットワークによりサタデーの編集部全体がつながっており、自室にいながらにして編集長、編集者全員と対話することが可能である。
外部より３０年は進んでいる学園都市最先端のネット回線を引いているため、ハッキングなどの対策も万全だ。
そんな中で、日本で2番目に売れている漫画雑誌は作られている。
ちなみに1位はジャ〇プだ。

『この作品を見てもらおう。削板軍覇作のド根性ゲコ太だ』

「いや駄目だろ？色々とアウトだろ！？」

連載会議の中、編集長が送ってきた漫画に木原は突っ込む。
パソコン越しだからこそ出来る、データの送付。その速さと気軽さ

には重宝するが、それとこの漫画は関係ない。
木原は漫画のタイトルを聞き、読むまでもなく駄目だしした。
「パクリだろ！？なんだよド根性ゲコ太って！？シャツにゲコ太が入って大活躍する話か？古いんだよ！何年前の漫画だ？っつか、こいつ何歳！？」
『流石木原編集。読むまでもなく内容を理解しているとは』
「やっぱりか！？既にあるんだよ、そんな漫画！その前に勝手にゲコ太を使っちゃ不味いだろ。同人誌じゃねぇんだぞ。著作権や色々問題があるだろ？」
『ふむ……言っていることはもっともだが木原編集』
「なんだ？」
木原の突っ込みに編集長は一度区切り、一度咳払いをして宣言した。
『漫画は面白ければいいんだ』
「面白いわけあるか！こんな漫画、連載なんかしたらいろんなところから苦情が来るぞ」
『果たして、この漫画を読んでからも同じことが言えるかな？』
「何グルメ漫画みたいなこと言ってんだか……」
木原は文句を言いながらも、送られてきた漫画を読んでみる。
最初は馬鹿馬鹿しいと思っていたが、読み進めていくうちに引き込

まれていき、気がつけば最後まで読んでいた。

『どうだね？』

「……面白い」

感想は面白さだけならば文句なし。色々と突っ込みどころはあるが、内容自体はとても満足のいくものだった。

「設定はあの漫画のパクリだが、内容はまったくの別物だ。ってか、何で主人公が番長になり、他校の生徒と乱闘してるんだ？ゲコ太がシャツの中に入った意味は何だ？これってギャグ漫画って言うよりヤンキー漫画だろ？だが、ヤンキー漫画と言う分には面白い」

『そうだろう？なら、連載は決定だな』

「いやいや、だからそれはねぇって、編集長。さっきも言ったがこれを連載したらいろんなところから苦情が来るから。今回は没だが、削板には普通にヤンキー漫画を書いてもらったほうがいい。戦闘描写はうまいし、友情・努力・勝利の３本柱をしっかりと押さえている。少し古い気はするが、ある意味それが新鮮で人気が出る気がするぜ」

『……それもそうか』

木原の指摘にモニター越しの編集長は暫し考え込み、決断を下した。

『よし、今回は見送ろう。削板軍覇にはその路線で新たな作品を描かせるとして、今回の連載作品はこの作品に……』

その後も論議を交わし、会議は進んでいく。
連載する作品、今回で打ち切り、終わらせる作品を話し合いで決め、会議ももう終わりだと言う時間帯、編集長が思い出したように木原へと声をかけた。

『ああ、そうだ木原編集。大事な話があるんだが』

「ああん？」

編集長からの大事な放し。それを聞き、木原はすぐさま携帯電話へと手をかけた。

『喜べ一方（アクセラぁ）！アニメ化決定だ』

「マジでか木ィィィ原くゥゥゥゥゥン！？ヒャッホーイ！」

場所は変わり、一方通行の仕事場。
そこで原稿を描いていた一方通行は、木原より告げられた吉報に喜びを露にする。

『マジだ。色々とやることはあるが、既に決定事項だから安心しろ。しかも時間帯はゴールデンタイム。1年間やることは決定してて、視聴率によっては続編をするそうだ』

「いいぜェ、超えてやるよ。ワン〇ースとナ〇トをなァ！！」

『期待しているぞ』

電話を切った一方通行は、何事かと作業の手を止めている垣根と上条に向け、高々と宣言した。

「アニメ化決定だァ、野郎共！今日は祝うぞ、うまいもン食いに行くぞォ！！」

「マジか！？この漫画もついにそこまで……」

「奢りでせうか？苦学生の上条さんとしては、一方通行の懐の広さを期待してそんなこと聞いてみたり……」

「そうに決まってンだろォが、三下ァァ！腹がはちきれるほどにうまいもンを食わせてやンよ。肉だ、焼肉行くぞ！お前、松坂牛なンか食ったことねェだろ？」

「うぉぉぉぉ！！幸運だあああああ！」

アニメ化の話題に盛り上がり、作業をやめて祝うために街へと向かう3人。

今日も今日とて、学園都市はとても平和なのでした。

第2話　編集会議（後書き）

編集長もとい、統括理事長が誰なのかは言うまでもなく……学園都市は平和でいいんだと思いますw
目指す目的は打倒ジャ〇プ！後の目的はほんのついでですw
さて、1話がこれじゃあまりにも短いので2話目にしておまけ、番外編を一つ。
番外編よりおまけの方が長いって、これ如何に？

番外編　とある出会い

「おい、今の子達レベル高くねえ？」

「ああン？どこがいいンだ、あンな年増。俺は中学生以上は興味ねェンだよ」

「どんだけロリコンなんだよ、アクセロリータ」

「うるせェ。ロリコンは認めるが、アクセロリータはやめろつってンだろォが帝督ン。冷蔵庫にすンぞ」

「何故か冷蔵庫って聞くと、背筋が凍るんだよな……ってか、ならお前も帝督ンって呼ぶのをやめろ」

「そいつァ無理な話だ」

「なら、こっちも無理な話だ」

それは1年ほど前の出来事。一方通行がまだ、クロウを連載していなかった日のこと。

知人である垣根と共に、日常品を購入するために街中を歩いていた。

「インクとスクリーントーンが切れてたなァ。あとついでに、夜食用のカップメン」

「お前ってそんなもんばっか食ってんのか？そんな食生活だと早死にするぞ」

「うるせェなァ。俺も料理とかしてくれる彼女が欲しいンだが、ンなもンは残念ながらいねェ。はァ……どっかに落ちてねェかなァ？料理上手な女の子」

「理想をぶちまけるのはいいが、自炊するって選択肢はないのか？」
「ハッ、俺が料理するタイプに見えンのか？」
「わりぃ、言っててそりゃないわって思った」
「だろォ？まァ、料理上手かは置いといて彼女が欲しィのは事実だが」
「それに関しては同感だ」
何気ない会話が交わされる。仲の良い友人同士のたわいのない会話。
そんな2人を見て、誰が学園都市のトップツーの能力者だと思うだろうか？
第一位、一方通行と共に歩くのは第二位、未元物質の垣根帝督。
「それにしても腹減ったなァ……早いとこ三下と合流して飯食わねェと」
「ああ、何時ものファミレスだろ？そういや知ってるか、一方通行。あのファミレス、よく第四位が来るらしいぜ」
「第四位？確か原子崩し（メルトダウナー）か？」
「ああ、しかも知ってるか？第四位ってかなりレベルが高い美人だぜ」
「とは言っても確か高校生だろ？守備範囲外だァ」
「お前は本当にロリコンだな」

「ハッ、俺からそれを取ッたら一体何が残ンだよ？」

会話に中身がない、とても馬鹿馬鹿しい内容。だけどそんな会話がとても楽しく、一方通行と垣根は笑っていた。

漫画を通じて知り合った2人。何時もはこれにもう1人加わって、いろんな意味で最強無敵の3人組（トリオ）が完成する。

その3人目とはファミレスで待ち合わせをしているため、急ごうとする一方通行だったが……

「あ、そー言えば金がねェんだった。おろさねェと」

「おぃおぃ、待ち合わせの他にも買い物に行くんだから事前におろしとけよ」

「わりィわりィ、さて……確か郵便局にＡＴＭがあったよなァ？」

金をおろすため、近くの郵便局に向かおうとする一方通行と垣根。

だが、その郵便局はどこか変だった。

「あン？」

「ああ、今日は休みだったか？」

シャッターが下りている。

平日で、時刻はまだ昼前の時間帯だ。どう考えても郵便局が閉まる時間帯ではない。

それなのにどうして、あの郵便局はシャッターが下りているのだろうか？

「あ、あの……」

「ん、なんだ？」

「ああン？」

不意に垣根の服の袖が引っ張られ、一方通行もそれに釣られるように視線を向ける。

「ひっ！？」

そこには花飾りの付いたカチューシャをした小学生くらいの少女がおり、垣根と一方通行の反応に小さい悲鳴を上げていた。

「なんだこのガキ？」

「お前の顔が怖すぎンだよ、帝督ン」

「少なくともお前には言われたくねぇよ」

「で、いったいどうしたンだ、お嬢さン」

「ひゃっ！？」

「ホラ、やっぱりお前だよ」

「……」

垣根に指摘され、一方通行は傷ついた。

顔はそれなりに整っている方だとは自覚しているが、それと同様に

目付きが悪いと言うことも自覚していた。
怯える少女にどう接するべきか思い悩む一方通行だったが、怯えていた少女自身が話を切り出してきた。

「助けてください！」

「あン？」

そもそも当然だ。最初に声をかけてきたのはこの少女である。用が無ければ話しかけてはこないだろう。

「中で風紀委員（ジャッジメント）が強盗に襲われて……！」

「風紀委員がァ？」

少女が指差すのはシャッターの下りた郵便局。
風紀委員と言うのは学園都市の治安を守る組織であり、強盗などはむしろ取り締まるべき立場にいる者達だ。
それが強盗達に襲われている。その事実に、一方通行どころか垣根までも怪訝そうな顔を浮かべていた。

「普通逆だろ？風紀委員を助けるだなんて」

「まァ、そりゃそォだけどなァ」

垣根の言葉に同意し、一方通行はめんどくさそうに頭を掻く。
その仕草に少女は今にも泣きそうな顔をし、と言うかボロボロと涙をこぼしており、他に助けてくれそうな人がいないか探そうとする。
だが、

「まァ、これもなンかの縁だ。助けてやるか」

「この場にいたら、上条も絶対助けると言いそうだからな」

その必要は無かった。

そして、これで事態は解決したも同然だ。なにせ、学園都市の頂点であるレベル5、その2人が助太刀するのだから。

「おィ、ひとつだけ確認すンぞ」

「は、はい！？」

一方通行の目付きの悪い視線ににらまれ、少女はびくりと肩を震わせる。

一方通行はあまり少女を怖がらせないように気をつけながら、彼にとってとても重要なことを尋ねた。

「襲われてる風紀委員っつゥのはお前の友達か？男か？女か？そして何歳だ？それによっては俺のテンションが変わるンだが」

「へ……？」

最強最悪のロリコン、始動。

「こンにちはァ」

「はぁ！？」

防犯シャッターが飛び散り、郵便局内の雰囲気は一変した。
強盗とそれを取り押さえようとする風紀委員の対峙。
対峙とは言っても能力の実力差はともかく、経験による差が大きく、
風紀委員の少女は強盗の男に追い詰められていた。
そんな緊迫した雰囲気に、そんなものは知らぬとばかりに入ってくる1人の少年。
彼は白い髪と、アルビノの肌に赤い瞳をしていた。

「エンジェル発見！いいねェいいねェ、最っ高だねェ！！可愛いじゃねェか、モロ好みだコンチクショー！ロリでツインテなンて最高すぎンだろォ！」

「ひっ……」

狂気に満ちた鋭い視線を受け、風紀委員の少女……白井黒子は思わ

ず背筋を震わせる。
この不利な状況を打破する切欠になるかと一瞬だけ思ったが、不気味に笑う少年を見てとてもそうとは思えない。
だが、黒子の直感は間違いではなかった。

「なんだお前は？こいつ（風紀委員）の仲間か？」

強盗が白い少年に問い質す。
警戒し、上着のポケットに手を入れていた。おそらくはそこに得物を隠しているのだろう。
だけどそんなもの、白い少年には全く関係が無い。
例え男がどんな得物や秘策を隠し持っていようと、白い少年には通じないのだ。

「おィ、怪我してンじゃねェか。こンなに可愛いのに痣でも残ったら大変だなァ。だが安心しろ、スゲェ藪医者を知ってンだ」

「……舐めてるのかお前？」

ゆえに白い少年は、強盗の男なんて気にしない。眼中にすらないのだ。
今、白い少年の目に映っているのは目の前の少女のみ。

「よし、行くか。なァに、医者のとこまで一っ飛びだよ」

「きゃあ！？な、何をするんですの！？」

「『ですの』？おィおィ、お嬢しゃべりかよ？お前はどこまで俺のツボを抑えてくれるンですかァ？本当に最っ高だよお前」

白い少年は愉快な笑みを浮かべ、黒子を抱き上げた。
彼女の小さな体に手を回し、お姫様抱っこと言うセクハラ一歩手前の抱え方だ。
実は、白い少年は少女をこのように抱きかかえることに憧れており、実際にできて少しだけ興奮していた。
柔らかい肌触り、暖かい体温、そして彼女の髪からシャンプーの感じる良い香り。
今、白い少年のテンションは最高潮にまで達していた。

「おい、俺を何時までも無視すんじゃねぇぞ！」

だが、今まで無視されていた強盗がついには切れる。
白い少年に敵意を剥き出しにし、上着のポケットから鉄球を取り出した。
それが彼の得物だろう。鉄球を利用した、何らかの能力を使うのかもしれない。
だが、彼は知らない。白い少年に、学園都市最強のレベル5、一方通行に敵対することがどれほど愚かなことなのかを。

「哀れだなァ、お前……このまま放っておけば見逃そうと思ってたけどよォ、俺と敵対するってンなら、マジで可愛そうになるわ。誰に対してそンなことを言ってンのかわかってるンですかァ？」

「……あ゛？」

一方通行の馬鹿にしたような言葉に、男は完全に切れたように睨み付ける。
そんな視線をものともせずに、一方通行は黒子を抱きかかえながらその場に佇んでいた。

「殺すぞ」

「やってみろよ、格下ァ。お前に俺が殺れンのか？」

両者が睨み合い、殺伐とした空気があたりに充満する。

戦闘が……殺し合いが始まる。

だけどそれは、一瞬で決着が付いてしまった。

「はっはァ、ざまァ見ろ、格下ァ！」

「……え？」

黒子には何が起こったのかわからない。気が付けば、男の方が倒れていたのだから。

「なんだよ……俺の出る幕なんてまったくねえじゃねーか」

「わりィな、帝督ン」

何時の間に現れたのか、茶髪の長身で、ホストのように、そしてチンピラのように見える風貌の少年が立っていた。
彼の名は『ていとくん』、ていとと言うらしい。黒子はそう認識していた。

「強盗もぶっ倒したんなら、早く金おろしてファミレス行こうぜ。上条も待ってるだろうしよ」

「そン前に病院だ。帝督ン、俺ァこの子を……名前なんてンだ？」

「え……？あ、白井……白井黒子ですの」

「黒子ちゃンか。個性的だが、いい名だなァ。でだ、黒子ちゃンを病院に藪医者のとこに連れてくから、お前が金をおろしといてくれ」

「めんどくせぇな……」

一方通行が垣根にカードを手渡し、話は一方的に進んでいく。

「あ、あの……」

「さて、行くか」

話についていけない黒子を無視し、状況は進んでいく。
一方通行は自らが蹴破ったシャッターから郵便局の外に出た。周りには騒動を聞きつけたのかギャラリーがたくさんおり、お姫様抱っこをされて出てきた黒子は正直目立っていた。
好奇の視線にさらされる中、黒子は体を張って助け出した少女の姿を見つける。

「あ、初は……」

「しゃベンな、舌噛むぞ」

「え？ひゃ、ひゃあああああああああ！？」

声をかけようとしたその瞬間、一方通行は宣言と共に空へ飛び上がった。
いや、正確には空に向かって落ちている。自身の能力、一方通行でベクトルを一方へと向け、まるで空を飛んでいるかのように落ちていた。

「ひゃあああああああああああ！？」

「はっはァ、どォだ、空を飛んでる気分は？」

黒子に一方通行の言葉に受け答えする余裕は無い。
彼女の能力は空間移動（テレポート）なのだが、まだ能力が未熟で、自分自身を移動させることが出来ないために一方通行から逃れることができない。ならば一方通行自身をテレポートさせるかと思ったが、なぜか彼には黒子の能力が通用しなかった。

「なんですの？誰ですのあなたは！？」

黒子は涙目になりながら、一方通行に何者なのか問いかけた。
歪む。一方通行の表情が意地悪そうに、とても愉快そうに歪んだ。

「第一位、一方通行ですの」

黒子の口調を真似た、冗談交じりの宣言。
これが一方通行（主人公）と白井黒子（ヒロイン）の、ファーストコンタクトだった。

おまけのおまけ

「えっと……どちら様でしょうか？」

「……白井黒子ですの」

黒子の治療を終え、一方通行はそのまま彼女を上条との待ち合わせ先であるファミレスへと連れてきていた。
当然ながら、そんな彼女が誰なのか疑問を感じる上条。
名前を聞かれ、黒子は正直に自分の名前を名乗った。

「あ、これはこれはご丁寧にどうも、上条当麻です……で、一方通行、どこから攫って来たんだ？」

「攫って来たって、失礼な……いや、間違いじゃねェな。あンまりにも可愛かったから攫って来ちまった」

「オオイ！やばいだろそれ！？マジで犯罪行為してんじゃねぇぞ！いつかやるとは思っていたが……お前そこまで」

「うるせェな、手は出しちゃいねェよ。ちょっと一緒に飯を食うくらいだ。その後で解放してやンよ」

「その際に一緒に頂くなんて考えてないよな？もしそうなら、付き合いを考え直すレベルだぞ」

「死ぬか？」

馬鹿らしい会話が交わされる。

友人同士の、馬鹿馬鹿しくてどうでもいいような会話だ。
学園都市のトップ、一方通行。そんな彼と何気なく会話している上条と言う少年はいったい何者だろう？

「ドリンク注いできてやったぞ。上条はオレンジ、一方通行はコーヒーだろ？」

「おゥ、わりーな」

「サンキュー」

そして、郵便局でも見た『ていと』と言う少年。彼らはいったい、どういった関係なのだろう？

「好きなもン、じゃンじゃン頼め。俺の奢りだァ」

一方通行が黒子のあたまをくしゃりと撫で、陽気にそんな事を言ってきた。
正直、頭を撫でられるのはあまり好きじゃない。せっかくセットした髪が乱れてしまうから。

「マジで！？じゃあ、俺は……」

「ただし三下、テメーはダメだ」

「なんで！？ってか、ボーボボ！？」

だけど、頭を撫でられるのが何でこんなにも心地よいのだろう？
何でこの雰囲気が、馬鹿馬鹿しいこの空間がこんなにも楽しいのだろう？

「上条、俺が奢ってやるよ」

「うぉぉ！天使様ぁ！！」

「うわ、抱き着くんじゃねぇ！」

「くかか！」

黒子はとても不思議な心境で、この3人の馬鹿騒ぎを見つめているのだった。

あとがき2

一方通行の連載前、そしてヒロインの登場。
漫画版、とある科学の超電磁砲の3巻に収録されてるあの話ですね。
黒子可愛いよ、黒子w
当時の初春、あんな派手な髪飾りを付けてないんですよね。いったい、中学に入学する間に何が起こった！？
ちなみにここの一方さんはロリコンです。シリアス、何それ美味しいの？
基本はギャグ全開でいきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6469y/

とある作家の一方通行

2011年11月20日18時59分発行